

送春

白居易

三月の 三十日に

春往きて 日また暮れぬ
嘆きては 往く風に問ふ
明朝は まさに居らずと

送らんは 江上の春

そここの 様子を見るに
花落ちて 水面を撲つ音
ほつほつと その数知らず

人生は 旅人に似て

両の脚 歩みを止めず
日また日に 前へと進む
行く手には 幾多の路ぞ

いくさごと 水火の災は

ひたすらに 避けてゆけるも
老いゆくは 自ずと至り
人の世に 避くる者なし

時により すべなしとして

身を倚する 池南の樹幹
このひと日 春を送るは
親縁と 別るるが如し

三月三十日
春歸日復暮
惆悵問春風
明朝應不住
送春曲江上
拳拳東西顧
但見撲水花
紛紛不知數
人生似行客
兩足無停步
日日進前程
前程幾多路
兵刃與水火
盡可違之去
唯有老到來
人間無避處
感時良爲已
獨倚池南樹
今日送春心
心如別親故

三月三十日 陰曆春の最終日